シャリー・ポンポン

パパの中間決算書

父から子への贈物

シャリー・ポンポン

パパの中間決算書

父から子への贈物

シャリー・ポンポン
―パパの中間決算書―

定価一五〇〇円

昭和五十四年七月十六日　第一刷発行
昭和五十四年十月一日校訂第一刷発行

©
著者　孝藤貴
発行者　小峯光一
発行所　(株)小峯書店
〒一〇一東京都千代田区神田神保町一ノ三九
電話（〇三―二九四）三七七四代
振替　東京3　七四三七八
印刷者　渡部栄
印刷所　(有)秀和印刷
製本所　(有)昭栄堂製本

落丁・乱丁本はおとりかえします

はじめに

はじめに

「シャリー・ポンポン」というのは、貴句子が二歳をちょっと過ぎた時に、入浴剤の容器とそれを入れたお風呂のお湯を指して言った言葉である。パパは、貴句子が何とも可愛らしい口振りで言ったこの言葉が忘れられず、また、二歳の子供のこの容器から受けた印象が、このような如何にも幼児語らしい言葉となって出てきたのではないかと思っていた。そして、パパのこと、ママのこと、あなたがたのことについて書こうと思った時に、その本の標題として、この言葉が浮かんだ。

この本は、パパとママの生きてきた姿と、あなたがた二人について、パパが考えていることを書こうというもので、多分、この本を書き終えた時、穣は勿論、六歳の貴句子も読めないと思う。できるだけ易しく書くつもりでいるが、六歳の貴句子が読める程易しくはならないだろう。

あなたがた二人が、成長するそれぞれの段階で、読んでくれたらいいと思う。貴句子は、仮名なら殆ど読めるが、その段階では、仮名をもっとよく覚えるため、仮名が全部読めるようになったら、仮名の部分だけでもいい、漢字を習い始めたら、漢字を覚えるため、辞書を引きながらでもいいから読んでもらえたら、パパは嬉しい。何も強制的に読むようにと言うのではない。あなたがたが、今持っ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ている本を気が向いた時に読んでいるように、読んでもらえばいい。貴句子は、よく新聞のラジオ欄を見て、自分の好きなマンガの標題を読んでいるが、それと同じような気持ちで読んでくれたらいい。こんなことでも、結構、字を覚えるものだ。特に、勉強しろと言うわけではないが、勉強なんていうものは、机に向かってするだけでなく、もっと身近なところにあると、パパは思っている。

パパは、功成り名遂げたから、この本を書いたのではない。寧ろ、生き方としては、馬鹿で、不器用で、凡そ、あなたがたの手本になるようなものではない。しかし、少なくとも自分で考え、自分で決断してきた。生まれてから死ぬまで、これは一度しかないからだ。然も他人ではなく、パパ自身が生きてゆくのである。そういう自分の生き方を大事にしたいからだ。他人に決めてもらって何かをして、うまくいかなかった時、唯その人が憎いだけで、反省の材料ともならない。自分で決めて失敗しても、誰を怨もう。誰も怨めない。唯自分の決断がまずかっただけである。このことは、他人に決めてもらったことより一層心に定着し、また、より大きな反省の材料ともなろう。

あなたがたが、何か事を決めようとする時、成可く多くの人の意見を聴いたほうがいい。人の意見も聴き、よく考えたうえで、また、自分の決心を考え直してみるがいい。もし、十人の人の意見を聴いて、その十人の人が、全部、自分の考えに反対したら、あなたがたはどうするか。その時、あなたがたが決めようとしていることが、あなたがた自身で、考えに考え、考え抜いたことであったら、そ

れは、あなたがたの本当の考えであって、仮令誰が反対しようと、自分の思った通りにやってみるがいい。但し、そのことが、他人に迷惑を掛けるようなことでなければ。

あなたがたが、この本を読めるようになった時、他の本を読むのと同じように読んでもらえばいい。何もパパが書いた本であることを意識して読む必要はない。他人が書いた本として読めばいい。何を感じとろうと、あなたがたの自由である。この人は、こういう生き方しかできないのであるから。

シャリー・ポンポン

——パパの中間決算書——

〈目次〉

はじめに

第一章　パパのこと

子供の頃……10
小学生の頃……15
趣味について……42
中学生の頃……96
高校・浪人の頃……108
大学生の頃……120
社会に出て……139
株について……144

第二章　パパとママのこと

パパのおじいちゃん……166
パパとママの結婚……183

ママのおじいちゃん……228
ママのこと……235
パパのこと……244
第三章　あなたがたのこと
現在まで……250
パパの無責任な夢……261
将来について……262

装幀　著者
絵　貴句子

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

第一章　パパのこと

子供の頃

パパは、太平洋戦争について、殆ど知らない。パパがこの戦争について知っていることは、B二九の編隊がよく家の上空を通り過ぎていったこと。その機体が太陽に輝いて、キラキラ奇麗だったこと。近所の家に、爆弾が落ちて火事になり、みんなで、水の入ったバケツをリレーして消火したこと。隣の駅の近くに、高射砲の陣地があり、そこから撃った弾は、殆ど当たらなかったこと。しかし、一度だけB二九に命中し、機体は真っ二つになり、まるで紙が宙に舞うように、二つの機体が、ヒラヒラと落ちていったこと。夜になると、遠くの空が赤く焼けていたこと。雑炊を食べていたこと。薩摩芋の蔓も食べたこと。柿の皮を干して、それをミンチで挽いて食べたこと。それが、とても甘くて美味しかったこと。パパが戦争について知っていることは、これぐらいである。戦争が何時終ったかも知らなかった。

パパは、昭和十六年に生まれた。昭和十六年という年は、太平洋戦争が始まった年で、この戦争は、

昭和二十年に終っている。パパが育った子供の頃は、この戦後である。パパは、五人兄弟の下から二番目で、兄一人、姉二人、妹が一人いる。おじいちゃんは、昭和四十二年に亡くなっているので、あなたがたは知らない。

子供の頃はよく遊んだ。今のように自動車が多くなかったし、近所には空地が沢山あったので、道路で、空地で、近所の友達と遊んだ。メンコ、ビーダマ、ベーゴマ、名前は忘れたが、鉄の輪を転がす遊び、仲間が二手に分かれて、喧嘩をしたり、水鉄砲で水を掛けあったり、何しろ、家にいるより外で遊んでいる方が多かった。

パパは、ベーゴマがとても強く、また、沢山持っていた。ベーゴマは、駄菓子屋さんで買った。それをグラインダーで、角を鋭く削ったり、中心が狂っている場合が多かったので、削って中心を合わせたりして、長く回っていて、然も強くなるように、色々細工をして使った。ベーゴマには、「太洋」とか、「松竹」というような野球のチームの名前が彫られていた。パパの持っていた「太洋」は、強かったので、とても大事にしていた。

夏になると、蜻蛉とか、蟬取りをした。夏の盛りには、塩辛蜻蛉が沢山飛んでいた。そして、その盛りが過ぎて秋が近付くと、それが赤蜻蛉に替わった。また、鬼ヤンマという大きな蜻蛉もいた。これは、塩辛蜻蛉ほど沢山飛んでいなかったので、貴重なものだった。塩辛蜻蛉は、お腹の部分が白と

黒で、どちらかと言えば、白の部分が多かったように思う。鬼ヤンマは、塩辛蜻蛉よりずっと大きく、草色で、塩辛蜻蛉の上の方を悠悠と飛んでいた。鬼ヤンマが現われると、胸をときめかしたものだ。網を片手に背を低くして、息を凝らして、下の方に降りてくるのを待つ。しかし、なかなか降りてこない。やっと降りてきたところを網を振る。上空を悠悠と飛んでいた時とは違って、網を振るわれると、急に敏捷になって、上空へ、すうっと舞い上がって、遠くへ飛んでいってしまう。

さあ、これから、鬼ヤンマの追跡が始まる。今のように家が沢山立て込んでいなかったので、上空に舞い上がっても、見失わずに追跡できた。パパは、必死で追い掛けた。遠くの方まで追い掛けていった。こういう時は、大概捕まらなかった。捕まらない悔しさで、今度は、下の方で沢山飛んでいる塩辛蜻蛉を無茶苦茶に追い回しながら帰ってきた。偶に、鬼ヤンマを捕まえると、これに糸を結んで、近所の池へ行く。その池の淵には、鬼ヤンマがよく飛んでいた。そこに行って、糸の端を持って鬼ヤンマを放す。すると、鬼ヤンマの仲間が寄ってくる。そこを網で捕まえようというのだ。

蟬取りには、鳥もちを使った。駄菓子屋さんで、鳥もちを買ってくる。これを長い竹棹の先の方につけて、もちが指につかないように、親指と人差し指に唾をつけ、竹棹を左手でぐるぐる回しながら、もちを、その二本の指で下の方に伸ばしてくる。竹棹の先端から二〇センチぐらいのところまで、満遍なくつけば、これで、準備完了である。木に止まっている蟬に気付かれないように、そっと近付き、

もちのついた部分を押しつければ、蟬は、もちについて取れる。何時も、こう、うまくいくとは限らない。失敗する時もある。その時はどうなるか。おしっこを引っ掛けられる。蟬は逃げる時、ざまあ見ろ、と言って、おしっこを引っ掛けて逃げるのだ。

もちで取る方法は、蟬の羽根についたもちが取れないので、蟬が汚なくなってしまう。そこで、次のような方法を使った。やはり長い竹棹の先に、直径二〇センチぐらいの針金の輪をつける。この輪に、できるだけ沢山、蜘蛛の巣をつける。そこでパパは、暑い日中、軒の下とか、木の間に張られた蜘蛛の巣を探して歩き回ったものだ。

近所の子と遊ぶ以外、唯一の楽しみは、紙芝居であった。「黄金バット」のおじさんが自転車でやって来る。おじさんは、その荷台の上に、紙芝居のセットを組み立てる。そのセットの下には、引出が幾つもあって、おじさんはそれらの引出を全部引き出す。その中には、水飴とか、杏子のようなお菓子が入っている。紙芝居を見る者は、何か買わなければならない。原則として、只見はいけない。集まった子供が、皆、お菓子を買うと、愈々紙芝居の始まりである。ここで、パパは、紙芝居を始めるつもりはない。沢山見たその内容は、もうすっかり忘れてしまった。紙芝居には、色々な出し物があったけれど、当時何と言っても人気があったのは、正義の味方、「黄金バット」であった。今で言えば、ゴレンジャーのようなものである。そこで、紙芝居のおじさんを「黄金バット」のおじさんと

いった。このおじさんが来ると、遊ぶのも止めて、皆歓声をあげて、おじさんの周りに集まった。また、パパは、黄金バットの真似をよくした。黄金バットは、マントを着ていた。パパは、風呂敷を首に結んで、押入れの中段からよく飛び降りたものだ。

当時、どこのグループにも、必ず餓鬼大将がいたもので、パパの家の近所にもいた。この餓鬼大将は、まことに悪い奴だった。具体的にどんな悪い事をしたのか、まるで覚えていないが、何しろパパのおばあちゃんも近所の人達も、その悪さには、ほとほと困っていた。また、この餓鬼大将とは別に、譬えて言うと、餓鬼大将が泥棒の親分とすると、隠居した大親分のような者がいて、これには餓鬼大将も頭が上がらなかった。始終遊んでいた仲間には、随分年齢差があった。餓鬼大将は、比較的年齢が上であったが、始終行動を共にしていた。一方、大親分は、餓鬼大将よりも更に上で、普段余り行動を共にしなかったが、やはり所所で、パパ達の仲間に顔を出していた。パパがこの大親分のことをよく覚えているのは、大親分が、よくパパのことを庇ってくれたからだ。パパが喧嘩で苛められたりすると、大親分が出てきて、助けてくれた。また、メンコ、ベーゴマで、パパが負けそうになると、パパの残りのもので勝負してくれる。当然、年齢的にも大分上なので、腕力もあるから勝つ。すると、その勝った分を全部パパにくれる。まるで黄金バットのような人だった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com